

## 難民から市民へ ―ビルマ難民の移動と定着

久保忠行（日本学術振興会）

### 要旨

本報告では、難民の再定住と社会統合のあり方について考察する。難民とは、国家からの排除と包摂を二重に抱えるカテゴリーである。難民が「問題」とされる一因は、難民の受入国がいかにか難民を包摂するかが課題となり、難民にとっては、その中でいかに自律を獲得するかが課題となるからである。

国連による難民「問題」の恒久的解決にむけたアプローチが、「本国への帰還・避難先での帰化・第三国定住」であるように、現行の解決策は、難民を国家的な制度枠組みに再統合し、難民に、サービス・モノ・情報といった有形無形の生活基盤へのアクセスを提供することとされる。しかし、依然として難民「問題」が収束せず、難民生活が長期化しているように、現行のアプローチには限界がある。したがって、難民が自律的な生活を送るための生活基盤へのアクセスについて、難民の目線からも解明することが肝要となる。

本報告では、タイの難民キャンプで長期間の難民生活を経た後、第三国定住制度という再定住支援制度を通してアメリカへ移住したビルマ難民(カレンニー難民)を事例とする。彼らの初期の定住過程を、フォーマル、インフォーマルな援助、就業面、教育面という支援の指標だけではなく、生業、社会関係の構築、相互扶助などの生活面から明らかにする。そのさいに、彼らが10～20年に渡って暮らしてきた難民キャンプでの経験にも着目する。難民キャンプでの経験とは、差別、抑圧、支援依存といったネガティブなものから、教育経験、支援機関との交渉術や、難民自身を組織化する方法の習得など、内外の関係を構築する経験といったポジティブなものもある。こうした経験は、支援に頼らざるを得ないなかで自律するための鍵となる。

移民と難民の違いの一つは支援対象になるか否かであり、難民と支援は切っても切れない関係にある。生活面からの難民の定着過程を明らかにする本研究を通して、従来のような支援を継続させるための研究ではなく、支援を脱するための研究や支援のあり方を考察するための手がかりとしたい。

また難民の移動の具体相に着目すると、先住者をつてとした移動、既知のネットワークを利用した定住先の選定といった移民の移動形態との共通点もみられる。難民の移動は支援を前提とした特殊なものでありながらも、移民の移動形態との共通点もある。難民の移動は「足による投票 (voting with the feet)」[Hansen 1981]とも表現されその自発性にも着目されてきたが、今日の移動の広がり、難民キャンプと定住先である第三国とが、携帯電話やインターネットなど繋がる空間的広がりによるものでもある。

### 参考文献

Hansen, Art

1981 Refugee Dynamics: Angolans in Zambia 1966 to 1972. *International Migration Review* Vol.15. No.1/2:175-194.